

## 令和 5 年度 野生鳥獣との共存に向けた生息環境等整備調査（屋久島地域）

### 報告書要約版

#### (1) 生息密度調査（糞粒法）

##### 【調査内容】

- ・ 下記 5 地点の調査結果からヤクシカの生息密度を推定し、地域間比較等を行った。さらに、過去にも調査されている地域に関しては、推定生息密度の増減と増加率を求めた。
- ・ 一湊林道（北）、愛子西（北東）、尾之間下（南）、大川林道奥（中央）、宮之浦林道（中央）

##### 【結果】

- ・（増加）大川林道奥、宮之浦林道、尾之間下、一湊林道 （減少）愛子西
- ・ 南西部等で倒木の発生により多数のシカが動いたことが増加の一因と推測される。愛子西は捕獲自体が少ないが、嗜好植物は目に見えて増加した。通年の協定捕獲の影響が大きい。

#### (2) 植生の保護・再生手法の検討

##### 【調査内容】

##### ①植生保護柵の保守点検

- ・ 既存植生保護柵 31 箇所（植生保護柵 23 箇所・萌芽枝保護柵 8 箇所）の維持管理。

##### ②マテバシイ萌芽枝の生育状況

- ・ 柵内外のマテバシイ母樹、萌芽枝、及びカシノナガキクイムシの穿入痕調査を実施。

##### ③植生保護柵内外の植生調査

- ・ 柵内外それぞれ 2m×2mの小プロットを 4 地点設定し、低木層（1m以下）と草本層について植物社会学的調査を実施。

##### ④植生被害ライン調査

- ・ 一湊林道（北）、愛子西（北東）、尾之間下（南）、大川林道奥（中央）、宮之浦林道（中央）

##### 【結果】

- ① 8 月の台風 6 号の襲来によりカンカケ（西部）・中間（南部）で倒木が発生し、大規模な柵の破損が確認された。愛子岳（北東部）、尾之間（南部）では軽微な補修で済んだ。
- ② 対象のマテバシイは低速で北上する台風の影響を受け、倒木が柵内外で発生したが、柵の破損は生じなかった。萌芽枝はカシナガの攻撃を受けた後に多数出す一般的なパターンと、カシナガの攻撃が減少し、樹体の体力がやや回復して萌芽枝を増加したパターンが考えられた。但し強度低下による幹折れが懸念される。
- ③ 種数及び実生本数は、多くの地区で柵内の方が柵外より多かったが、食害の激甚なカンカケ 300m は種数・実生本数とも柵外の方が多かった。中間 5 の柵内は平成 26 年にサクラツツジの大発生があり、今回の実生本数の減少はそれらが消失したためである。多くの地区で柵内の不嗜好植物の割合が柵外より低く、柵内の植物を狙ったヤクシカの攻撃による柵の破損が懸念される。
- ④（大川林道奥）被害有の本数は緩やかに減少。（一湊林道）出現本数・被害有の本数とも

緩やかに減少。(愛子西・宮之浦林道) 食害がなく、種数・出現本数とも増減を反復。(尾之間下) 種数・出現本数とも減少。食害が少なく、減少の原因は食害でない可能性がある。

### (3) 森林生態系の管理目標に関する現状把握・評価

#### 【管理目標】

- ・①屋久島の多雨環境を反映したシダ植物の林床被覆の回復②屋久島世界自然遺産の顕著な普遍的価値である植生垂直分布を形成する植物種の多様性の回復③ヤクシカの嗜好性植物種の更新④絶滅のおそれのある固有植物種等の保全

#### 【現状評価】

- ①多くの地点で柵内外の被覆率が目標に至っていない種が多く見られた。
- ②2018年に目標が未達成だった標高1400mを含めて種数が増加し、8標高帯全てにおいて調査開始当初の2008年度の種数を超え目標を達成していることが確認できた。
- ③環境省RL(2020)掲載種が1種あった。確認種数はほとんどの標高帯で減少した。減少しなかったのはヤクシマオナガカエデが新規確認された標高1000mと標高1600mのみであった。また、継続して確認された種の被覆率を見ると標高1600mでは大きく減少し、標高200mのマテバシイ以外は増加がなかった。以上より標高1000mを除き目標を達成できていない。
- ④確認地点数については、過年度の状況を維持・増加し目標を達成していたが、確認されなくなった地点もあった。種数については、地生種で1地点、着生種で2地点において減少していた。モニタリング地点別の生育個体数についても多くの地点で増加し、目標を達成している一方、減少または消失し目標に至らなかった地点もあった。これらの地点については注意する必要がある。

### (4) 高層湿原におけるヤクシカの生態調査

#### 【調査内容】

- ①自動撮影カメラによる分析
  - ・夏季から冬季にかけて自動撮影カメラ10台を20週間以上設置し、画像データを分析。
- ②糞塊調査
  - ・冠水状況と植生群落状況から区分し、花之江河33箇所、小花之江河22箇所を実施。

#### 【結果】

- ①ヤクシマザルの群れの近くで採餌したり、登山客の接近を許すヤクシカが確認された。本年度から月別に集計し、100日当たりのヤクシカの月別撮影頭数は花之江河で9.6頭、小花之江河で9.5頭となりほぼ変わらなかった。両湿原でタヌキは確認されたが、ノイヌ・コイタチは確認されなかった。
- ②8月・10月とも花之江河の方が小花之江河よりも糞塊数が多かった。自動撮影カメラの調査結果から、ヤクシカの撮影頭数は両湿原でほぼ同数であるので、冠水域の多い小花之江河では糞塊の流出が起きやすいことが考えられる。